

第 49 回大会セッション K 木村周市朗著『ドイツ国家学と社会改革：クラウゼ派自然法論の成立と問題圏』（御茶の水書房、2023 年）を読む

報告者：杉田孝夫(お茶の水女子大学名誉教授)・金山 準(北海道大学)・深貝保則(横浜国立大学名誉教授) リプライ：木村周市朗(成城大学名誉教授) 世話人：鳴子博子(中央大学)

本セッションは、木村周市朗会員の前著『ドイツ福祉国家思想史』（未来社、2000 年）以降の研究集成である『ドイツ国家学と社会改革：クラウゼ派自然法論の成立と問題圏』（御茶の水書房、2023 年）の合評会である。セッションは、ドイツの内からの観点とともに、フランス、イギリスとの対比などドイツの外からの観点も重視して、著者が知的営為の場とする、社会思想史と社会政策の交差する問題領域に分け入って議論を深め広げてゆくことを企図したものである。ドイツ政治思想史、フランス社会思想史、イギリス経済思想史の観点から三者が報告を行った。

戦後ドイツでは「福祉」(Wohlfahrt)という語が却下され、「社会支援」(Sozialhilfe)が採用された。「支援」を目指す「社会国家」ドイツにおいて「社会」概念はいつ、どのように登場したのだろうか。杉田報告は、その由来をポリツァイ学から国家学に至る過程で登場する「社会」概念生成のコンテクストとして描いていると本書を評する。杉田会員はまず、ラウの「官房学再編成」への批判的検討に注目し、本書を、カントの自律的な市民社会理念やカント主義的な近代化論によって隠されていたドイツ観念論および旧官房学における「社会的なもの」の可能性の発掘と捉える。そしてフィヒテの講義「新方法による知識学」(1798/99) のノートである「クラウゼ手稿」に着目し、フィヒテにクラウゼという弟子が存在し、クラウゼに欧州とスペイン語圏で思想を伝播させた弟子アーレンスがいたことを明らかにした本書の、フィヒテ研究、ドイツ思想史研究への寄与を強調する。本書の示すフィヒテ『自然法の基礎』(1796-97)と『新方法』との連関は、1790 年代と 1800 年代のフィヒテの思索の断絶よりも連続性と深化を示すものと考えられるからである。『ドイツ国民に告ぐ』(1808)は単なる時局的な講演としてではなく、フィヒテの思索の総決算として理解すべきである。さらに、クラウゼはヘーゲルに行く手を阻まれたと言えるのかと問い、クラウゼとヘーゲルの思想の距離、アーレンスの伝語での自著出版や欧州、中南米への影響、波及に関心を寄せて報告を締め括った。

金山報告は、フランス革命における中間団体の抑圧が国家と個人との中間領域への問いを 19 世紀フランスの中心的な問いとしたという周知の理解に言及したうえで、ドイツにおける傍流クラウゼ派の思想は、フランスにおける主流の議論のアーリーナではどのような特徴を持つのかと問う。アーレンスとピエール・ルルーはクラウゼとサン=シモン主義という共通の背景を持つとの理由から、両者の対比を軸に分析を進めるが、金山会員は、19 世紀フランスのアソシエーション概念には、「結社」よりも「競争」と対置される「協同」の意味合いの方が強いという特異性があると主張する。しかし 1833-34 年を境にアソシエーション概念は「協同」と「結社」の混在状態に移ったとみる。こうした問題圏の中で、アーレンス(クラウゼ派)の思想はどのような特徴を持つのか。さらにルルーらフランスの「人類」、「人類教」概念とクラウゼ派の「人類」との交錯を指摘し、クラウゼの「交互」性と全体との関係、「相互的生」と「社交性」との関係を問うた。

深貝会員は体調を崩されて対面参加は叶わなかったが、音声付きパワーポイントを自動再生さ

せる形で報告していただいた。報告は、「全き家」「全き社会」を問題として、オイコノミア論と有機的  
社会のヴィジョンからの検討とブリテンにおけるクラウゼ情報の三点を軸に展開した。まず、オイコ  
ノミア論について、ドイツにおいては官房学、国家学-財政学の系統に家産的な管理の思考が通底し  
ているが、英語圏においては家産管理的な意味は消えてゆくという違いを指摘したうえで、英語圏に  
ついては、スターキーの『対話』にみられる16世紀半ばの「真のコモン・ウィール」論やジェームズ・ス  
チュアートの「国家管理-経営のための知の体系」を、ドイツ語圏については16世紀の家産の学とし  
ての古典古代オイコノミア論の復活、オイコノミアのカトリックの体系化のなかでの布置、配剤を挙げ  
る。そのうえで、報告者はラウの官房学の刷新のなかでのオイコノミア論の特徴とクラウゼの議論の  
特質を問うた。有機体的な社会観については、身分的秩序、職分の言説、循環と再生産の言説、  
スペンサーやダーウィンらの進化論という異なる複数のパターンを提示したうえで、有機的な社会観  
のドイツ思想、原子論的な社会観が優勢なブリテンという対比のなかで、とりわけ、バーナード・ボザ  
ンケット『国家の哲学的基礎』の society as a whole の議論に着目してクラウゼ派と対比する。さらに  
ブリテンにおける19-20世紀のクラウゼ情報を紹介し、クラウゼの重層的な人類論が現存の地球上  
人間種の領分を考えるうえで持つ意味を問うた。

三報告を受けて著者・木村会員は、クラウゼ、アーレンス、モールの肖像を示し、国家学とは何か、  
ここからなぜ社会改革が出てくるのかという根本的な問題を解説したうえで、さまざまな論点を挙げ  
つつ、リプライを行った。主な論点は、クラウゼの人類同盟はドイツ型ユートピア思想であること、カ  
ント、ヘーゲルにおける人間の感情・直観の軽視について、クラウゼはサン=シモン主義と直接接触  
していないため両者を近づけすぎない方がよいとの指摘、オイコノミア神学に関するアガンベンの功  
績への言及、本書の隠れたテーマはロマン主義であるとの直言であり、なかでも強調されたのは近  
代主義者カントの功罪であった。リプライの後、フロアより、小谷会員、李会員、安藤会員、恒木会  
員から質問が出され活発な質疑応答が続いた。(参加人数：約20人)

なお、セッションの時間的制約のために、報告への応答として当日話されなかった要点を木村会  
員は報告者に後日送付された。また、深員会員は報告の「補遺」をお送りくださった。今後のさらなる  
議論の深化に活用したい。